



10ha



辻元 真由子

A

D

材を今後発電事業で有効利用して行きたいという思いがある。

新たに計画している木質バイオマスの発電事業について。木質バイオマス発電事業会社としてBPS大東を立ち上げ、現在木質バイオマス発電所を建設中だ。一般家庭、街路樹、道路建設、解体に伴い発生する木質系の廃棄物や山間部の未利用材を都市樹木再生センターにおいてバイオマス燃料として資源化する。それを利用してBPS大東にてカーボンニュートラルのクリーン電力としてエネルギーに生まれ変わらせる。近隣から出る廃棄物や林地残材などを燃料チップ化して利用することで、環境負荷への低減、地域への貢献ができる。また、電力は長い距離を移動すると損失が発生するので、消費地で発電した方が効率も良くなるという利点がある。現在稼働中の木質バイオマス発電所はあるが、多くは林業圏で林業が盛んなところに位置し、山間部で発生する山間未利用材のみの使用を行うところが多い。BPS大東は、都市部に位置する立地を活かして近隣から発生する廃棄物由来の木質チップを多く使用することで、地産地消型のエネルギーを生み出し、みなさまの生活のお役に立てればと考えている。BPS大東で生み出された電力はFIT制度により売電する予定。木質バイオマスは何由来かによって4つの価格帯が設定されている。山林未利用由来のもの、一般木質バイオマス由来のものは、どこでとれたものか由来の証明を付けないと32円/kWhと24円/kWhで販売できない。そこで、適正に間伐材、一般木質バイオマスを扱える事業者だというお墨付きとして事業者認定をもらっている。

都市部には都市部に、山間部には山間部の木質バイオマスがある。都市樹木再生センターは、

緑のリサイクルのパイオニア企業として、これからはあらゆる場所で発生する木質バイオマス資源を有効活用し、循環型社会の構築及び環境負荷低減に微力ながら貢献して行きたいと考えている。

参加者:山主さんにはどの程度のお金が支払われるか。

辻元:山林の整備は結構費用がかかる。出た材を弊社で再資源化し電力の源として利用するのか、山からどのような種類の材が出るかによって変わるため一概には決められない。まだ仕組みとして整っていないので、現在は山主さんと相談しながら進めている現状。

参加者:再生可能エネルギーの賦存量調査によると、当市で使える再生可能エネルギーは太陽光か街路樹等の剪定枝ということが出ている。果たして、剪定枝だけでビジネスが成立するのか。森林系のものがないと成立しないのか。

辻元:現在稼働している木質バイオマス発電所のほとんどは、山林未利用材がメイン。一般廃棄物由来や建設資材廃棄物由来を使う方が稀。それだけで発電するとなるとかなりの量のチップも必要になってくるので、発電所を動かすのは現状では厳しい。

参加者:全国展開しているような企業はあるのか。日本の展望としてどうか。モデル予算ということだが、国の予算を使わずに広がっていけるのか。

辻元:地元を大切にしたい。全国展開でなく地産地消で地元の課題解決をしたい。公的資金は入っていない。山の

事業としてはご近所の山主さんのお手伝いをしていたところだが、困っている声が広がって活動も広がったらいいと考えている。モデル事業と言ってもまだまだ小さな事業。全国的に木質リサイクル会社はあるが、発電まで考えているかどうかはわからない。

地域の方々とまちづくりの NPO を一緒につくって活動している。大和郡山市は生駒市の少し南に位置するところにある。豊臣秀吉の弟、秀長が城主となった城下町。今はお城は残っていないがまちなかには城下町らしい風景が残っている。金魚の3大産地であることが特徴。本日は、旧川本邸（遊郭）の事例を紹介する。